

第三百六十八回 青葉会

平成二十八年十一月二十四日(木)

午後六時〜八時半 文京区民センター二階

〈顧問〉 ☆ 川合万里子 先生

〈選者〉 ◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 川口孤舟 後藤保明 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯
星田啓子

〈投句〉

伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 宮内規雄 山崎亜也
山田けいこ(新人) 山内天牛 渡邊盛雄

〈紙上選句〉

赤田堅 安部眞希子 楠田彦十 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 福島正明
MH 村田くに子 山田けいこ 山本三恵

《互選句》

九点 ☆ 母帰る杖の音聞く小春かな

堂哉 (眞・忠・万・保・弘・龍・ゆ・灯)

允

七点 ☆ 潮鳴りの他は聞こえず冬銀河

孤舟 (猛・万・忠・保・ゆ・允・正)

◎ 錆兆す長押(なげし)の銃や獵男(さつお)老ゆ

一灯 (眞・紀・孤・ゆ・允・く・三)

六点 ☆ パレットに絵具盛り上げ櫛紅葉

孤舟 (眞・彦・弘・敏・ゆ・灯)

友減りて一卓で足る爛の酒

健介 (忠・保・龍・啓・H・け)

荒庭に木霊の気配柚子熟るる

盛雄 (紀・龍・允・正・啓・三)

五点 ☆ ◎ 打掛の裾厚く曳く菊人形

弘子 (万・孤・灯・く・け)

◎ 雨もまた一入(ひとしお)秋を惜しみけり

猛 (堅・紀・孤・龍・H)

四点 ☆ 立冬や余技も継ぎをる万頭屋

紀久男 (万・彦・正・け)

(☆…余技が何かをもつと知りたい↓「万頭屋河東節も継ぎ冬に入る」)

☆ むささびの飛んで星夜の忍者めく(高尾山) 孤舟 (万・ゆ・灯・啓)

(☆…切字を使用する↓「むささびの飛ぶや星夜の忍者めき」)

☆ 小さき熊手大き熊手に道譲る 恵洲 (万・弘・灯・允)

(☆…「道譲る」↓「道譲り」)

晴れ渡る富士の麗姿も冬の影 ゆたか (千・敏・H・く)

☆ 冬風の内灘砂丘狭(せば)まれり けいこ (眞・万・弘・三)

☆ しぐるるやビルの狭間で墓参り そらお (万・く・け)

(☆…「せ」↓「へ」)

新蕎麦や酒もう一本所望せり 猛 (堅・千・敏)

☆ 朝寒のごみ出す人の猫背かな 忠彦 (万・保・允)

(☆…↓「朝寒に」)

木枯しの去りて真白な朝の山 全 (弘・千・H)

☆ リフトより両足垂らし紅葉狩(湯沢) 孤舟 (猛・万・敏)

◎ 通過電車が掻き立ててゆく寒さかな 恵洲 (眞・孤・彦)

子ら皆に青空のあり運動会 ゆたか (彦・保・弘)

☆ 新酒酔むひと夜の交はり旅の友 全 (紀・万・千)

土器ひそむ国分寺跡や草紅葉 一灯 (猛・万・啓)

(☆…「ひそむ」||「埋もる」では如何?)

シヨベルカーがくがく吠えて冬に入る 全 (保・龍・け)

☆ ドル売も可と札立てて熊手売る 昇 (眞・万・正)

☆ 紅き実を忘れがたみに枯葉散る 啓子 (猛・ゆ・H)

☆ 昔知る女将の宿の鮪かな(下北半島大間) 亜也 (堅・万・彦)

☆ 湯豆腐にノンアルビールの余生かな 盛雄 (忠・万・龍)

大滝君の落語会(落語カフェ)

二点 ☆ 腕上げし高座たつぶり冬の汗

紀久男 (万・敏)

(☆…腕上がり高座にたつぶり冬の汗)

◎ たまさかの家族団欒小春かな 猛 (孤・く)
 ◎ 千歳飴引きずり歩く晴着かな 忠彦 (孤・灯)
 ☆ 新米や精米待つ間の長話 保明 (万・く)
 ☆◎ 菊花展小学生の会長賞 弘子 (万・孤)

(☆:「の」↓「へ」)
 ☆ 手提げから出すニツキ飴日向ぼこ 全 (万・三)
 (☆↓「手提げから肉桂飴出し日向ぼこ」)

陽を浴びて形容し難き裏紅葉 健介 (堅・千)
 (☆:この中句は詩的でないので「形容し難き」↓「たとへやうなき」では如何)

◎ 為したきことあれば俵せ栗おこわ ゆたか (堅・孤)
 ☆ 小豆干す火の見の脚や遠浅間 一灯 (万・啓)

(☆・啓:「火の見の脚や」↓「火の見櫓や」冬の季語)
 ☆◎ 涸川へ響く鉄橋渡る貨車 全 (孤・H)
 ☆ あるがままに生きて幸福秋桜 規雄 (万・敏)

(☆↓「在るがままに生きて幸せ秋桜」)
 ☆ 木屋町へ秀次の墓時雨けり けいこ (彦・正)

香室に声のこぼるる冬雀 全 (啓・三)
 ☆ 何度目か「となりのトトロ」観る夜長 天牛 (万・正)

「御浜御殿」仁左衛門の綱豊 紀久男 (万)
 ☆ お目当ての仁左に満足口跡(こうせき) 冴ゆ 全 (万)

☆ 初雪や句会へ急ぐ老朋友 全 (け)
 火酒呷りジャズボーカルに浸りをり (☆:火酒は年中通用するので季語にはならない。「浸りをり」↓「浸りきり」)

☆ 落葉踏みまた来年も会ひたいね 猛 (紀)

☆ 泌尿器科で旧友に会ふ小春かな 忠彦 (紀)

☆ 御十夜のお供へ見つめ子ら合掌 保明 (万)

☆ エレベーター足もと紅葉に場所を空け 全 (万)

☆ 日帰りの小旅や駅に冴ゆる月 弘子 (忠)
 (☆:下五「冴ゆる月」↓「月冴ゆる」)

☆ 文化の日抜き足さし足鳴き廊下 堂哉 (弘)

☆ 近場でも京に劣らぬ紅葉狩 啓子 (堅)

☆ ◎ 老银杏(ろういちよう) 師走に近く命燃ゆ 全 (千)

☆ ◎ 我が胸は波に揺蕩ふ落葉かな 規雄 (孤)

☆ ◎ 特大の冬月見上げ帰心出づ 亜也 (万)

☆ ◎ 足しやぶる香箱蟹に母想ふ けいこ (三)

☆ ◎ 越冬の蛹あちこち家の壁 天牛 (忠)

☆ ◎ お嘶しは玄人はだし冬のカフェ 全 (紀)

☆ ◎ 大地の精吸うて色白大根引く 盛雄 (猛)

● 次回青葉会

十二月十六日(木) 恒例師走寄席見物 ↓ 年忘れ句会

正月五日(木) 鈴木演芸場(昼席) ↓ 神田・「岩戸」 会費六千円

歌舞伎座(昼の部)

一月二十六日(木) 初句会 午後六時〜八時半 文京区民センター

平成二十八年十一月句会報

一 50 数年ぶりという11月の初雪。案の定、ドタキャンが増え重裝備の一灯さんら9名出席。投句は新人の山田けいこさん（小生の河東節のお仲間。名古屋在住）含め10名。猛さんの司会で快調に飛ばし、御覧のように、堂哉さん・孤舟さん・一灯さん・健介さん・盛雄さんが好成績でした。盛雄さんからの「きさらぎ」上梓祝のお裾分「伊丹・諸白」（小西酒造）、忠彦さんの「白神山地の四季」（秋田・八重寿）、小生の缶ビールとつまみ、弘子さんの「志乃多鮪」や「ザビエル」の饅頭（大分）を賞味しつつ、「紅」レポート（啓子さんの写真と恵洲さんの寄稿）、眞希子さんからの選句のFAX、芳博さんの近詠（河島彦明さんからまとめて貰いました。「泥几句会」より）、初芝居四座のチラシ等を回覧。二次会はお向いの焼鳥屋「鳥兆」。

二 関係者近詠

関取の下駄からころと両国橋	万里子	水澄むや渡し乗り場のありし岸	恵洲
同郷の力士を応援水入りに	全	——「NHK俳句」十二月号	西村和子選
早ばやと中日に勝越し九月場所	全	「潮騒」川口襄——『俳句四季』11月号	
秋場所の俳句を詠むもまた国技	全	秋蛩舞ひ暗闇に書く草書	襄
師の句碑へ櫛落葉を拾ひつつ	全	邯鄲の鳴く幽玄の夢の中	全
思ひ切り徒長枝を伐り秋高し	全	爽籟も乗せあらよつと人力車	全
飢ゑながら猛暑の記憶敗戦忌	全	水槽に布目たしかな新豆腐	全
浜屋顔海辺に住みてサラリーマン	眞希子	鳳仙花爆ぜふるせとの濤の音	全
百合の葬愛唱聖句と讚美歌と	全	芒野や貨車百輛の曳かれゆく	全
トランプに牧師も招じキャンプの夜	全	月明の湖へ出でゆく舟ひとつ	全
夏祭ひたすら綿菓子作りけり	全	星月夜胡弓が濡らす袖袂	全
白シャツの白輝きて誕生日	弘子	万象も心象も秋澄みにけり	全
森に死ぬものへ一列蟻の列	全	ペンギンのペタペタ歩き秋うらら	全
一日の疲れを畳む秋日傘	全	潮騒や月影渉る千枚田	全
掃苔や告げて詮無きこと多き	青史	月今宵硝子の馬車の馭者の鞭	全
厨には厨のちちろ愛しきかも	全	銀鱗のここにあそこに下り簾	全
八月の雨須臾にして上がりけり	全	躊躇ひのありていざよふ月の雲	全
夕立や殺し場の幕降りて出て	紀久男	落葉松黄葉落陽の樹肌照り	全
——「萬緑」——十一月号		ロゼ色に暮れ残る空木守栴	全

どちらかと言へば成行き浮寝鳥	正明	紅葉散る赤ヘル次は日本一	昇
大雪やパンを買へずに和定食	全	何もせぬ指ささくれて子規忌かな	彦十
啄木鳥やひとの本意を量りかね	全	「やつと声聞けた」と小春の電話かな	全
小春日や水面にゆるる海鼠壁（倉敷）	允章	「僕」という還暦世代栗の飯	全
狭間より覗く小春の城下町（姫路城）	全		

三 中山芳博さんへの献句

・ 昨年九月芳博さん出席の青葉会での高点句「虫の音に心遊ばせ爪を切る」に副わせていただき			
「かなかなに目覚めの遊寝の髪梳（とかな）」：万里子	天牛	ホツケーの雄逝く	
・ 人事通の芳博逝けり暑き日に	正明	・ 佳麗なるステイック捌き秋暮（くる）る	堂哉
・ 人氣無きホツケー・グラウンド秋の風	孤舟	・ トラキチの熱血句友逝く秋落暉	紀久男
・ 高き山崩れ献杯菊芳し		・ 閑けさや新酒の献杯句仲間へ	全